

2012年 9月23日・「盛岡タイムス」では

「北」を指針に文芸評論

盛岡市 川村杏平氏「鬼古里の賦」出版

盛岡市の川村杏平さんの評論集「鬼古里の賦」が、コールサック社（東京都板橋区）から出版された。

古今の俳壇、歌壇を論じながら、「北」の一語を指針に、日本の文学史を照射する。山口青邨、柏崎驍二ら岩手の俳人、歌人の作品に通じる一筋の金脈を探り、西行、芭蕉など先哲の思想をたぐる。

川村さんの筆法により、中世から現代までの文人たちが、山脈のように連なる。

川村さんは宇都宮市出身。俳誌「古志」「草笛」同人、「鬼」誌友、「北宴」同人。句集「羽音」、評伝「無告のうた 歌人・大西民子の生涯」がある。

「鬼古里の賦」は、川村さんが長年にわたり読み込んできた詩歌を一作ごと緻密に読み直し、大胆に論じた。

「第一級の俳人の証しは、その洞察力にあるとあってよい」と断じる川村さん。ある作品は選者の視点でクールに突き放し、ある作品には虚心にオマージュ（賛辞）を捧げる。

それぞれの作品、作者らを生んだ風土への愛着も。「『鬼古里』とは盛岡近郊にある地名で、標高438メートル『オニコリ山』からとった。岩手山には鬼ヶ城という尾根もある。これは宮沢賢治の詩にも登場する。6月第2土曜のチャグチャグ馬こ。この馬祭りの蒼前神社はその麓にある。かつての馬産地岩手は鬼の棲む里でもあった」と明かす。

山崎和賀流、小原啄葉などに「北の俳人」「北の歌人」として畏敬を払いつつ、「開かれた魂の地図」の章では角川春樹を論じ、文壇の改革者としての手腕を評価する。東北の風土の中から日本人の精神を深く掘り起こし、同時にフロンティアへの視点を忘れない。

「俳句の効用は日本人として生まれた良さに自覚的になり、季節の移り変わりや伝統的な美意識にも敏感になります。人間は言葉を操って家庭生活も社会生活も送るわけですが、その一語一句に込められた一期一会の思いも敏感に感じ取れるようになる。今はカタカナ語やインターネット、ITの時代で情報が量産されてきます。でも限られた文字数でキチッと自分の意志を伝えるには俳句がいい。何年かやるうちに『ああこんなことも表現できるのだな』と理解する日が必ず来る」。古きを温めながら、日本文学の未来を探る。

と紹介されています。